

99/5.
西子玄に

原子力安全問題と社会システム (メモ)

原子力安全は本来技術により担保されるものであるが、原子力の科学体系は従来の人間の認識を超える時間・空間の概念に立脚している上、エネルギー利用の場合、単位重量当たりの発生量が莫大でかつ相当量の放射線を伴う事など、人間社会にとって未踏の分野であるだけに、また利用が軍事から始まったという不幸な歴史と相まって、社会的に警戒の目でみられてきたのは、当然と言える。一方、原子力開発関係者も「安全」の概念とそれを確保するシステムとを、自信をもって提示し、それを実証するに至っていないため、原子力関連の出来事はいつも(関係者からみて)「不当」或いは「過大」な評価ないし反応を招き、多くの場合それらに対する関係者の「説明」や「反応」や「対策」が、さらに(関係者からみて)予想外の結果を生じ、その「結果」がまた技術的対策(基準や規制のあり方も含め)に大きな重みをもたらし、更に状況を難しくする・・・といった悪循環に陥っていく例も少なくない。

このような状況は、個々の出来事(事故・故障など)をとりまく様々の社会システム(小は職場から、中は関連組織間の力関係、社会的な格差など、大は国民性、国家体制に国際関係にいたるまで)の幾つかものとの間に生じた、いわば「干渉現象」(干渉という言葉は物理学の意味、従って「干渉」は時に共鳴にもなる)が、時に重畳して、現出したものといえよう。

今後も安全関連の出来事が起きる度に、いろんな社会システムが、事故等の情報と種々の形で「干渉」し、いろんな衝撃を与え続けることであろう。そこで取り合えず、現在までの主な(つまり、事故そのものの大きさよりも、社会的衝撃の大きかった)例について、以上のような視点で、事故発生の原因とその影響の態様とについて、予備的な分析を試み、原子力安全問題と(旧来の)社会システムとのかかわり合いを探る「方法論」への手掛かりとしたいと考える。

取り上げるケース(候補)

スリー・マイル原子炉事故

チェルノブイリ原子炉事故

「もんじゅ」Na漏洩事故

東海処理工場廃棄物処理施設の火災・爆発

使用済み燃料輸送容器データ改ざん事件